看護学部

2024年度学校推薦型選抜試験

小　論　文

注　意　事　項

1　小論文の問題冊子には、課題と下書き用紙がある。白紙・空白の部分は下書きに使用してよい。

2　別に解答用紙１枚があり、解答はすべてこの解答用紙の指定欄に記入すること。指定欄以外への記入はすべて無効である。

3　**解答用紙の所定欄に受験番号を記入すること。氏名を記入してはならない。なお、記入した受験番号が誤っている場合や無記入の場合は、小論文の試験が無効となる。**

4　問題冊子と解答用紙は持ち出してはならない。

5　試験終了時には、解答用紙を裏返しておくこと。

6　解答用紙と問題冊子の回収後、監督者の指示に従い退出すること。

課題

以下の文を読み、問題に答えなさい。

世間にはいつも勝ち負けがある。「勝ち組・負け組」といった少々品のない言葉、「サバイバルゲーム」といった「経世済民」に相応しくない言葉があたりまえのように口にされる「競争社会」や「グローバル市場」では、勝ち負けはあまりにあからさまである。

しかし、勝ち負けというのは、思われているほど自明のものではない。勝ちが強く、負けが弱いというふうに、かんたんに言えるものではない。漆黒の闇のなかでは、眼の不自由な人に手を引いてもらわなければならない。病みがちの人は天候の異変に敏感である。また、他人の痛みにも気づきやすい。そこでは「強い」が「弱い」に裏返り、「弱い」が「強い」に裏返る。

勝負事というのもそうだ。ひたすら勝ち続けるというのは至難の業である。とくに名人級の人ともなれば、囲碁や将棋がそうであるように、勝ったり負けたり、対戦成績はほとんど互角である。すぐには気づかれないような小さな、小さな瑕疵(かし)が、命取りになる。

だからトーナメント形式の闘いは酷なものである。一度きりの微かな瑕疵によってすべてが決してしまうのだから。

とはいえ、トーナメントはよく考えられた形式でもある。頂点に立った一人を除いて、強きも弱きもすべて等しく、一度は負けを経験するのだから。そしてトーナメント戦に出場できた選手の背後には、さらに無数の敗者が控えている。そう考えると、トーナメント戦においてもっとも普遍的な経験とは、負けることだと言えそうだ。負けたときの口惜しさ、苦労の報われなさ、それを思い知らされるという経験をもつことが、他者を思いやる気持ちを育む。そう、敗者を、人として一回り大きく、ということは強く、する。

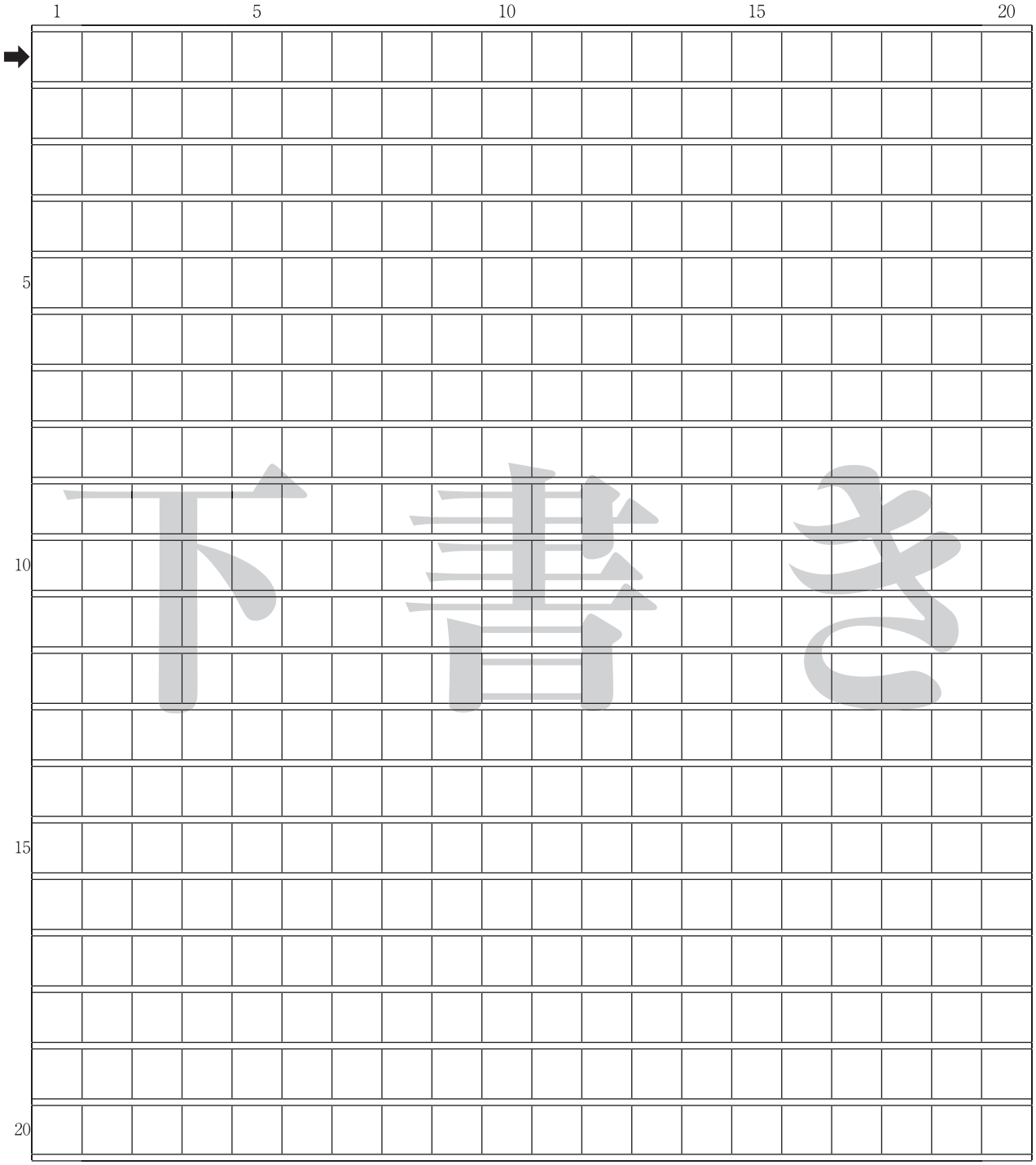
17 世紀フランスの思想家、パスカルが『パンセ』（前田陽一・由木康訳）のなかで書いている。――「人間の弱さは、それを知っている人たちよりは、それを知らない人たちにおいて、ずっとよく現れている」。

鷲田清一著『濃霧の中の方向感覚』2020 年（3 刷） 晶文社より抜粋，一部改変.

問題　筆者が述べていることについて、あなたの意見を 400 字以内で書きなさい。

下 書 き 用 紙

（下の矢印から横書きではじめること。）



（20×20）　　（400 字）